

昭和二十九年五月十日 初版印刷
昭和二十九年五月十五日 初版發行

昭和文學全集 36
井伏鱒二集
太宰治

著者 井伏鱒二
宰治

發行者 角川源義

印刷者 小田茂作
東京都品川區大井寺下町一四三〇

發行所

株式會社 角川書店
東京都千代田區富士見町二ノ七
かぎ かは しよ てん

振替東京一九五二〇八
電話九段〇一一一〇一二四

本文紙 本州製紙株式會社
クロース 日本クロース工業株式會社
整版所 扶桑印刷株式會社
印刷所 東日本印刷株式會社
製本所 鈴木製本所



井伏 鱒二

昭和二十七年秋(五十五歳)

ラジオ東京録音室にて



太宰 治

昭和二十二年秋(三十九歳)

三鷹自宅にて

井伏鱒二
太宰治
集

昭和文學全集
角川書店版

目次

太宰 治集

巻頭寫眞

筆蹟

井伏鱒二集

巻頭寫眞

筆蹟

お堀に關する話

吹越の城

貸間あり

普門院さん

をんなごころ

本日休診

遙拜隊長

鳥の巢

お島の存念書

ワザビ盗人

隨筆

見晴らし茶屋 (二六) 堀君と藥屋 (二六) 太宰治の

印象 (九七) 天沼の米屋 (二〇六) 二月二十日記

詩

峠の雪の朝 (一四七) 禁札 (一九四)

解説

山本健吉

年譜

一九八

太宰 治集

巻頭寫眞

筆蹟

思ひ出

道化の華

富嶽百景

東京八景

グイヨンの妻

櫻桃

斜陽

人間失格

もの思ふ葦より

五所川原 (三三) 繪はがき (三四) 春晝 (三四) 世

界的 (六七) 海 (六四) わが神話 (三四) わが悲し

み (三四) 冷酷といふことについて (三四) いづ

はりなき申告 (三四) わが愛好する言葉 (三四四)

政治家と家庭 (五二) 小志 (五二)

年譜 小山 清 五二

解説 五二

年譜 五二

年譜 五二

年譜 五二

年譜 五二

井伏鱒二集

雪の雪ふ裂け雪がなだれるその
なだれに能が乗つてゐるあぐらをのき
安閑と煙草をすふやうな愉ぬで

そこに一ふ、能がある

井伏鱒二

お濠に關する話

一

見たか見て來るか

福山の城を

前はお濠で

ボラが住む

備後福山城は水野勝成の構築によるものである。現在、この城跡には五層の天主閣と、三層の櫓と一つの城門だけを残存し、いづれも國寶建造物に指定されてある。天主閣は本丸の東北隅に高くそびえ、その周圍に立ちならぶ老松にとりかこまれてゐる。遠くから眺めると、天主閣は七分通り松の木のかげにその裾を没してゐる。

この天主閣は明治初年ごろ競賣に附されたことがある。標準價格、金十三兩で賣り出されたが、城下町の或る鍛冶屋が、金二兩の札を入れた以外には、入札したものは一人もなかつた。古きものは總て破壊すべし、文明開化に趨くと叫ばれてゐた當時のことである。若しも入札して世間の物笑ひにでもなると、文明開化の紳士たるものの恥ぢである。

子孫に至るまでの恥ぢである。とり毀し費用の差引きを考へると、打算の目あてがつかかねる。

しかしこの天主閣は、北側の外壁を第三層まで鐵板で覆はれてゐる。町の鍛冶屋が冷やかし半分に金二兩の札を入れたのも、その鐵板に執着があつたからである。もちろん二兩では落札するわけがない。

この鐵板は、天主閣の外壁を強固にするために貼りつけられたものである。かつて御一新の直前に、薩長側が軍隊を率きつて東に攻めのぼつた。その途上、長州軍は福山城を去る十里西方の三原町を包圍した。そのとき福山藩では、まだ佐幕が勤王が大勢が定まつてゐなかつたが、要するに薩長に對して福山藩の軍備の威容を見せようといふことになつた。そこで城下町や近郊の鍛冶屋を非常召集して、天主閣の外壁いちめに鐵板を貼りつけるべきものと云ひ渡した。なつかしい色の白塗に裝束をほどこして、薩長を驚かすに足る鐵壁たらしめようといふのである。

鍛冶職たちは徒弟見習どもを連れて來て、二日仕事を一日にして壁に鐵板を貼りつけた。短冊型で倍大の鐵板を、留め釘で壁に打ちつけるのである。ところが天主閣の北側の壁を第三層目まで鐵板で包んだとき、もうそれ以上には鐵材の貯へがないことに初めて氣がついた。そこへ長州軍が押し寄せて來た。長州軍は堂々と本通りを西から押し寄せて

來て、川の堤防のかげに陣取つた。そして向う側の堤防の上に大筒を据ゑつけた。川は城の西七町のところを北から南に流れてゐる。城内では、初め長州軍が城の北側の岡に大砲を据ゑつけるものと思つてゐた。そのため城の壁に鐵板を貼りつける急工事も、先づ北側の壁から着手したのである。しかし長州軍は一息に城を攻め落す氣勢を見せ、西から押し寄せて來て城の西側に陣を布いた。岡に大砲を引きずりあげる手數など、面倒くさいと思つてゐるごとき勢ひである。

長州軍の放つ大筒の音は、まことに大きな音であつた。彈丸は空に虹なりの圓弧を描いて落ちて來た。最初の一發は、内濠のまんなかち落ちて白い水柱をたてた。二發目は、濠の水際から二尋か三尋くらゐ離れて城の石垣に突きあたり、それは爆發しないで彈ねかへつて水のなかに落ちた。三發目は濠の水際に落ちた。

城内には、臨時の大筒玉見分役といふ肩書を持つた士が五人ゐた。それが各、十五人づつの部下を連れ、大筒の彈丸がとんで來るのを待ち受けてゐた。その部下たちは、それぞれ濡れ蓑を持つてゐた。大筒の彈丸は割合ひゆつくり落ちて來る。その彈道は目に判つて見えて、彈丸が凡そどの見當に落ちて來るかを目測することが出来る。そこで彈丸の落ちて來たところへ駈けつけて行き、彈丸が破裂する寸前に濡れ蓑を彈丸にかぶせるのである。

る。五人の大筒玉見分役はみな砲術の心得のある士であるが、なかでも三谷軍之進は江戸で江川垣庵の教場に學んだ老武者である。

軍之進は彼の同役をいましめた。

「みな御用心されるべし。いづれ敵の彈丸は、塀のなかに落ちて来る。いま敵が引きまはしてをる大筒は、臼砲といふ箇で彈丸はポンペン玉といふ彈丸ぢや。敵は發着の自在な忽砲も持つてをる。」

しかし長州軍は、まだ忽砲を打つて來なかつた。恰度そのとき城内では、樞要な役目の人たちが大手門の脇の幔幕のなかで協議に耽つてゐた。いまだに佐幕が勤王が態度が定まらないのである。若し勤王に轉向した後で、紀州侯が援兵を送つてよこすやうなこともであると大事である。樞要な役目の人たちは、決戦を避ける方法だけを考へてゐた。

この協議はなかなか決定しなかつた。多くの城兵たちは、幔幕のなかの協議について、それを豫想したり噂したりすることを固く禁じられてゐた。また敵に對して、攻勢に出ることも禁じられてゐた。しかも敵は間近く迫つて來て、威かしの彈丸をすばりすばり濠のなかに打ち込んでゐる。

三谷軍之進は部下のものに命令した。

「みんな、もう一度、薙に水をかけてどつき薙を濡らせえ。手槽に水を汲めえ、釣瓶を毀すな落着いて水を汲めえ。」

そのとき一發、ちよつと音響の變つた大筒

の音がした。軍之進は空を振り仰いだが、「忽砲を放つたのぢや。」

と云つた。彈丸は飛んで來て、天主閣の窓に命中した。第三層の一つの窓に命中し、そのまゝ重々しく屋根を轉がり落ちて地面に落ちて來た。

「薙、薙。榴彈ぢや、それ薙をかぶせえ。」

危機一髪であつた。軍之進は自ら飛んで行つて、すでに部下が濡れ薙をかぶせたその彈丸にもう一枚の濡れ薙をかぶせた。薙から蒸氣が立ちのぼつた。

彈丸の命中した窓は、縦に入れてある太い角材の棧が、三本ほど削りとられたやうに損傷を蒙つた。ことに一本の棧は、もうすこしのことで撃ちぬかれてしまひさうに手ひどくやられてゐた。萬一そこが撃ちぬかれたら、彈丸は窓の内側で爆發した筈である。

堀越しに遠目鏡で見ると、敵が堤防の上で悠々と大筒に彈丸をこめてゐるのが見えた。

軍之進は部下に警告した。

「一同、用心せえ。今度は何玉ぢやらう。何玉であつても周章てるな。」

敵はゆつくり狙ひをつけて火蓋をきつた。

「それ、撃つて。」

つづいて、どかんと大筒の音がきこえ、彈丸は虚空に拋物線を描いて飛んで來た。城内の三層の櫓の方で、不意に鯨波を擧げるやうな騒ぎ聲が起つた。同時に、彈丸の爆發する音が轟いた。その方角で、

「加賀主ちやア。」

と警告する叫び聲がきこえ、

「いや、新式の燒玉、ちやア。」

と訂正する聲がきこえた。

城内は一時に森閑としたやうに思はれた。その靜寂を破つて、城内の野戰筒の丁知方が、

「野戰筒、備打ち、用意……。」

と號令をかける聲がきこえて來た。しかし、まだ發砲を命じたわけではない。四挺の野戰筒には一挺に八人づつの兵が集まつてゐて、砲身の向きを改める操作が行はれた。

たぶん敵は、燒玉一發で城兵の度胸をぬいたと信じたのにちがひない。それを最後にはつたりと打ち方を止め、堤防の上に並べた大筒を城に向け、いつ何時でも火蓋をきる態度を見せてゐる。

敵の燒玉は、可成り火勢が強いものと思はれた。從來の燒玉に較べると燒立ちが十倍も激しく、著發も至つて充分である。この

一發で、三層の櫓のわきにゐた兵二人が落命し、四人の重い手負ひが出た。そして十人あまりの軽い傷のものと、目をまはしたものが一人あつた。

これに對して長州軍では、命を落したものはたつた一人にすぎなかつた。これは、その當人自らの過失によるもので、この者は長州軍の偵察先發隊の一員として濠に沿うて行軍する途中濠のなかにはひつて死んだのである。

長州軍の先發隊は、まだ長州軍が城に向かつて砲撃してる最中に本隊を離れて出發した。肩に鎗砲を擔いだ兵卒約三十名が、その先頭を馬に乗つて行く隊長に引率され、その後ろから若干名の人夫のやうなものが一人の兵卒に引率されて出かけたのである。彼等是不敵にも、濠の向う側に沿ひ隊伍をたたして行進した。ところが濠の水面に、一尺あまりの緋鯉が一びき腹を見せて浮かんてゐた。もう一びき、三尺もあらうかと思へる大きな白い鯉が、矢張り腹を見せて浮いてゐた。長州軍の大筒の彈丸で目をまはしたのかもわからない。初めのうち長州軍は惜しげもなく、ずぶん濠のなかや石垣の水際に大筒の彈丸を撃ち込んだ。石垣の水際近くで爆發した彈丸もある。そのために鯉は腹をかへしたのかもわからない。

城の堀からのぞいて見ると、大きな白い鯉は全く死んでゐるやうに見受けられた。長州軍の先發隊の面々も行軍しながらその白い鯉を見ながら通りすぎた。その後ろから人夫若干名を引率して歩いてゐる兵卒は、濠ばたに立ちどまつてその鯉を見た。彼はよほど魚捕りが好きな男にちがひない。擔いでゐた鐵砲を人夫の一人に擔がせて、草鞋の紐を結びなほすやうな恰好をして人夫たちをやり過した。先頭の隊長や兵卒等は、城兵が見てゐるのを意識してゐたと見え、魚釣りの好きな兵卒一人をそこに残したまま隊伍を正して行軍した。

魚釣りの好きな兵卒は、仲間の姿が家並みのかげに見えなくなつてしまふまで、草鞋の紐を結ぶやうな恰好を續けてゐた。彼はそろそろ草鞋をぬぎ、それから腰の刀や胴亂のやうな雜囊をとり除き、帶をといて股引をぬいだ。

彼は裸ひとつの裸になつた。彼は石垣を降りて行き、波のたたないやうに濠の水につかつた。城内の兵はこの有様を城の堀からのぞいて見てゐたが、先づ大音響で自負するところのある大月左近といふものが大聲で呼ばはつた。

「おい、その長州藩の士、おぬしは、お濠のその鯉をとらうとするのぢやらう。それは止めたした方がよからうぞ。おい、長州軍の大筒の彈丸はお濠をねらつて落ちて來る。危いから止めたした方がよからうぞ。」

もちろん左近の聲は、城内の人たちにもきこえたので、堀の上にのぞく者の數は増えて來た。銃眼からのぞいて見て、

「おい長州藩、無暗なことはせぬがよい。その鯉はお濠の主かもしれぬ。」と怒鳴つてゐるものもあつた。

長州藩のその兵卒は石垣につかまつて、水面から首だけ出して大音聲に呼ばはつた。それは大月左近の聲よりも幅のある滋味を帯びた聲であつた。怪しい城内の騒音を排してよくきこえたが、濠のなかのその兵卒は、長

州訛りを避け諸曲の會話を眞似た表現を用ひて大きな聲で怒鳴りだした。

「おい、如何にも、ここに罷り出でたるそれがしは、この濠に浮かぶ鯉をば、いま手掴みにせんとするものにて候。かく申すそれがしは長州軍の士、水練の達人の名を得たる、神戸の助近と申す當年四十一歳のものにて候。」

そこで大月左近も聲を張り上げて、諸曲の會話にすこし似せた表現で應答した。

「それがしは福山藩の士、大月左近。おぬしは何故にて、大筒の彈丸の降り來るなかに鯉とるや。それは風流にはあらず、無風流なり。」

濠のなかの神戸の助近は呼ばはつた。

「おい、その戒めも一理これあり。然るところ、それがしすでに衣をぬぎ、今や水のなかに浮かぶなり。あの鯉とは、何の手数やなからんと存するにて候。これやこの鯉とは、何の手数やなからん……。」

そこまで呼ばはつて、彼は石垣を離れ濠のなかに浮かび出た。波をたてないやうに靜かに泳いで行き、さうして彼は水面に腹を見せて浮いてゐる大きな鯉にいきなり抱きついた。その瞬間に、鯉は背を上に起し、尾鰭で水面に渦を刻みつけて水底に逃げ込んだ。神戸の助近は鯉にしっかりと抱きついたまま、水の底に持つて行かれた。鯉は死んでゐるなかつたのである。

城の堀からのぞいてそれを見てゐた士卒たちは、ちつとお濠の水面を見守つてゐた。大月左近は大きな聲で、お濠の水に向かつて呼ばつた。

「おお、長州藩の士、神戸の助近、どうしたのぢや、おお、出て来ぬか。」

堀からのぞいてゐた他の士卒たちも、みんな大きな聲で神戸助近の名を呼んだ。しかし助近は、たうとう姿を見せなかつた。お濠の水面も皮肉なほど風いでしまつた。濠はたは、人通りがなくてひっそりしてゐた。暫くすると家並みの間の細みちから、百姓風の一人の男が現はれた。もともとこの濠は、幅の広い路になつてゐて、普段は家中の士の遊歩場になつてゐた。百姓風情の、無意味に徘徊すべき場所ではない。それに附近の人たちは長州軍襲來のため、家財をまとめ雨戸を釘づけにして立ち退いてゐた。

百姓風の男は藍色の手拭で頬かむりをしてゐた。彼はあたりをきよるきよる見廻した後、さきほど神戸の助近がぬきすてておいた濠はたの衣類のそばに駆け寄つた。いきなり彼はそこにあつた刀をとりあげて、自分の腰に差した。そして衣類を裏返しにしたり逆さにしたりしてゐたが、すばやく胴巻のやうなものを取り上げた。

城の堀からのぞいて見てゐた士卒等は、大いに立腹した。しかし籠城を命じられてゐるこの場合、城門の外にとび出して行くわけに

は行かなかつた。空砲でおどかさすわけにも行かなかつた。或ひは長州軍は、城内にただ一發の空砲でもきこえるのを待ち受けてゐるかもしれないなかつた。彼等の軍に反抗する徒黨と見て、一舉に數門の大筒を撃ち込んで來るかも知れない。濠はたの百姓風の不逞の徒は、下層民獨特の感覺でもつて、その間の機微を呑みこんでゐたものにちがひない。彼は胴巻のやうな品物のほか、胴亂のなかの何やらこまごましたものを内ふところにしまひ込んだ。

城の堀からのぞいてゐた大音響の持ち主は、濠はたの賊に向かつて大きな聲で呼ばつた。

「おお、その百姓、その方、何を量見ちがひなことを致すのぢや。待て、その胴巻は長州軍の勇士、神戸の助近の所持品である。その方のごとく所持品を剥ぎとつては、當藩と長州藩と掛合ひの際、當藩に苦衷がある。刀もそこへ置け。」

濠はたの賊は、きこえないやうな風をして、帶まで奪ひとつて彼自身の腹にぐるぐる巻きつけた。長州兵の常用する半幅の白い帶である。

「おお、百姓、その方、血迷つたか。長州兵の憎しみを受くることを知らぬのか。城下のもの一同のためにならんのか。」

却つて賊は次第に落着いて來て、長州兵の股引をとりあげて足をそれに通さうとし

た。

「おお、城下の衆、誰か來て賊を取りおさへろ。あの賊を逃がしては、わが藩の名折れになる。ひいては、わが藩を窮地におとし入れる。誰か早く取りおさへろ。」

そのとき、家並みの切れ目の大通りから、騎馬で駆けつけて來るものがあつた。まぎれもなく、これは長州軍の騎馬兵である。さきほど出發した先發隊の隊長であつた。

その騎馬兵は、まっしぐらに駆けつけて來た。

濠はたの不逞の徒は、非常に欲が深くて逃げ足の鈍い男であつた。彼は騎馬兵が馬をとめる間に股引をはき、家並みの間の細路に逃げ込んで行かうとした。騎馬兵は馬からとび降りて、不逞の徒を後から攔んで濠はたに引き戻して來た。そして頬かむりを引つたり、その頬を拳骨で張り倒した。

不逞の徒は仰向けにひっくりかへつた。

城の堀からのぞいてゐた大月左近は、一應顛末を説明するために、得意の大音響で呼ばつた。

「おお、その長州軍の隊長に申したい。われ等は、ここにあつて先刻より始終を望見してをつた。貴下の隊士、神戸の助近殿と申さるる仁は、お濠に浮かぶ鯉をとるのぢやと稱し、濠にとび入つて果てられた。そのとき神戸殿は、われこそは當年四十一歳、神戸の助近と名乗られた。それが最後の言葉であつた。」

長州兵の隊長は返事をしなかつた。聞えぬふりをして、その間に不逞の徒の懷を取調べた。その懷から、胴巻と矢立が現はれた。隊長は珍奪品をすべてとりかへし、これ等の品物を衣類といつしよにまとめて兵兒帶で結へ、不逞の徒の背中にくりつけた。ついでに細引で不逞の徒を後ろ手に縛りあげ、ながく伸ばしたその細引の端を乗馬の鞍に結びつけた。

城の塀からのぞいてゐた大月左近は、念のために更に呼ばはつた。

「おお、無言の長州軍の隊長に重ねて申したい。神戸の助近殿は、鯉をとると脱衣され、池に浮かび出でた鯉と共に沈まれた。これはわれ等の目のあたり見てをつた實證ぢや。しかもそこに縛されてをる不逞の徒は、おそらく他藩より漂泊して參つた者に相違ない。」

長州兵の隊長は聞えぬふりをして馬に乗り、不逞の徒に馬の先頭を歩かせて出發した。その有様を城の塀越しに見おろすと、一人の馬子が背中荷物を負ひ、長く伸ばした綱で馬をひいて行く風情に見えた。馬子は背をかめてすたすたと歩き、馬上の隊長は胸をそらし手綱を片手にとつて、鞍上に心地よきさうに揺れながら家並みのかげに消え去つた。彼等は西に向かつて立ち去つて行つたのである。

二

この長州兵の隊長はまだ年若く見えてゐたが、なかなか物のわかる人物であつた。それが、江戸にたびたび往復した人と思へ、齒ぎれのいい江戸辯でもつて、不逞の徒である俄かに仕立ての馬子に話しかけた。屈託なさきうに、無造作な調子で話しかけるのである。

「こりや馬子、貴様が首尾よくわが輩の云ひつけに従へば、貴様がどつきり錢を呉れてやる。その錢は、いまに通用しなくなる當藩の紙幣ではない。小判といふものを呉れてやる。」

馬子はまだ後ろ手に縛られてゐたが、馬上の人の氣前のよさに感服して幾らか元氣をとり戻してゐた。

「へい大將様、有難う存じます。それで大將様は、今晚はどこへお泊りで御座いますか。」

馬上の隊長は、
「今夕は神邊の驛と申すところに泊る。いや、まだ確かとはわからんが、たぶん神邊に泊る。」

と云つた。

馬子は急に歩程をのろくした。

「こりや、どうした馬子。もそつと、早く歩け。」

「へい、神邊にお泊りで御座いますか。あしこの驛は、先づ宿屋がみな寒がつてをります。それに、あしこは水が悪う御座います。」

「嘘を申すな。わが輩はたびたび江戸へ往復の節、神邊の驛には都合三度も泊つてをる。水は悪くないぞ。」

「はて、大將様、御存じて御座いましたか。」

「貴様は、神邊の者か、それとも神邊に行く途中の村の人間だ。同じ村の者に、自分が後手にされてゐるのを見られたくないと見える。よろしい、綱を解いてやらう。」

馬上の隊長は馬から降りて、馬子を後ろ手に縛つておいた綱を解いた。それから馬子の背中に結びつけておいた荷物も解いてやり、その荷物を馬の鞍に結びつけた。

「大將様、どうも有難う存じます。」

馬子は地面に手をついて頭を下げた。再び馬にまたがつた隊長は、鞍に結びつけた革袋から福山藩の紙幣を一一と掴みとりだして、

「こりや、兩手を出せ。子供がお菓子を頂くやうに、兩手を出せ。」

さう云つて、隊長は兩手を重ねて出した馬子の手のひらに、氣前よくその紙幣の一と掴みを掴ませた。

「これは駄賃だ。いまにその紙幣は通用しなくなる。思ひきつて費つてしまへ。貴様は馬の後からついて来い。」

「へへッ！」

馬子は感激のあまり、咽喉に聲がつかへて物が云へなかつた。

馬上の隊長は、馬に跑足を踏ませて路を急

いだ。その後ろから、馬子が肘を張つた姿勢で駆け足でついて来た。

切り通しを越えて川沿ひの路に出ると、前方が遠く打ち開けて見えた。しかし見渡したところ、隊長の部下はどこを行進してゐるのか一人も見えなかつた。

「こりや、馬子、わが輩は急ぐ。貴様は、貴様の村に歸つて、明日は長州の大軍が村に押し寄せて来ると云ひ觸らしして歩け。よいか、さうすれば後日、必ず莫大な恩賞にあづかるのだ。貴様は村一番の分限者になる。」

「へい、有難う存じます。長州の大軍が、押し寄せておいでになると云ひ觸らしして歩きます。」

「左様。大體において、一萬五千の大軍が来ると云ひ觸らすのだ。それから長州軍が村を通りすぎるとき、村の者が屋根にのぼつたり崖の上から長州軍を見おろすことはならんのだと云ひ觸らせ。ことに瓦屋根に登つて見おろすことは、斷じてならん。それからもう一つ、長州軍は勤王軍である。百姓を大事にする軍勢だと云ひ觸らせ。」

「大將様、かしこまりまして御座います。」

「よいか、貴様は、いまに村一番の金持ちになる……。」

馬上の隊長は馬首を立てなほし、街道を神邊驛の方に向かつて駆け去つて行つた。

馬子は尻端折りの工合をなほして頗かむりをした。すると馬子ではなくて百姓に見え

た。彼はふところ手をした。ぶらぶら歩いて歸るやうに見せかけて、ふところのなかで紙幣の數を計算した。その紙幣はまだ新しく、附け木のやうにばりばりする堅い手觸りで、都合三十三枚あつた。このやうな大金は、まだ一度も手に掴んでみたこともない。彼はその紙幣を、ぐつと驚掴みにしてみた。所詮、村に歸つてこれを一枚づつ費ふ場合には、その都度、一枚づつ揉みくしやにして皺をつけなくては人にそれまわれるおそれがある。また皺の寄らない紙幣を人の前に出すことは、貧乏な百姓の勞苦を無視することである。他人を踏みつけにすることである。

この百姓は、神邊街道に沿ふ横尾村の者である。彼のうちは、街道の裏手にある蘘葦き三種長屋の右のはづれの家である。家族は一人もゐない。貧乏で怠け者で卑怯で弱い者いぢめをするといふ近所の評判で、嫁に来るものは一人もゐない。

彼は家に歸つて来ると、大枚の金を箱膳の引き出しに入れて外にとび出した。

「大變だ、うわア大變だア。」

と喚きながら街道にとび出して、日ごろから一ばん仲の悪い長兵衛といふ者の家の前に立ちどまつて、喚きたてた。

「儂はいまお城下へ行つて来たア。明日、長州の大軍が三萬三千人も攻め寄せて来るちふこつた。みんな路を清めてお迎へせぬと大變だア。性根の悪い奴はみんな徒刑に連れて行

かれるらふこつた、性根の悪い奴は用心せえ。」

彼は自分と仲の悪い長兵衛につら當てのもりで、喚きたてた。彼は長兵衛が呆氣にとられてゐるのを尻目に見て、今度は博奕打ちの權三郎といふ者の家に駆けつけた。彼は權三郎親分に、日ごろから乾分にしてもらひたいと思ひながら、その都度それを口に出しては云へなかつた。親分は鼻であしらつて相手にしてくれないのである。今日からは博奕の元手もあるし、一大事件を觸れこむ餘蘗もある筈にちがひない。彼は勢ひよく親分の家に駆け込むと偉い鼻息で云つた。

「よう親分、大變だ。長州の勤王軍といふのが明日この村へ来るちふわ。それで勤王軍の大將が儂をつかまへて、貴様は歸つて長州軍が四萬人、攻めのぼつて来ると云へちふわ。それからまた、貴様の親分といつしよに村ちゆうをよく取締つて、村の者が屋根の上や崖の上から長州の兵に石を投げぬやうにせいちふわ。さすれば、貴様も親分も共に莫大な恩賞にあづかると云つた。親分、さつそくながら村ちゆうを取締らう、手を貸してもらひたい。」

親分の權三郎は上り框に足を投げ出して坐つてゐた。彼は梅の核を食入れの根附に仕上げるため、丸く磨き減らした核に切出しで波模様を彫りつけたながら聞いてゐたが、いつもの通り囁んで吐き出すやうに云つた。

「ふふう、では運の字お前にきくが、勤王軍ちふのは何のこつちや。」

この運の字といふ意け者の百姓は、ちよつと出鼻をくじかれた形であつた。彼は急に聲を落して、懇談的に出た。

「つまり早い話が、親分、長州軍の大將は、儂と親方に村を取締れちふのだよ。勤王軍とは長州軍のことにきまつてをる。」

「それでは、長州軍とは何のこつちや、儂は長州軍といふものに一面識さへないのだもの、ふふう儂は知らん。」

親分は梃子でも動かうとしなかつた。

「しかし親分、長州軍の大將が恩賞を呉れるちふよ。」

「運の字、もう歸れ。歸らぬとお前をつまみ出すかもしれんからな。」

そのとき家の前の街道を、二十人あまりの軍兵が駆け足で通りすぎた。その後ろから數人の人夫が駆け付けた。軍兵はみな股引をはいて白い兵児帶をしめ、肩に鐵砲を擔いでゐた。これは隊長と分れてから路を迷ひ、先きに行つた隊長を捜しに行く偵察先鋒隊である。彼等は二人づつ並んで、前後に列を正して通り過ぎて行つた。すると、裏山の方で騒がしい人聲がきこえ、子供の泣く聲や牛の啼く聲がきこえて來た。

「はて、何ぢやあら。」

親分は裏口にとび出して行つた。見ると、裏の山裾につづく細い路を、大勢の人が急ぎ

足に行列をつくつて歩いてゐた。大人はみんな大きな風呂敷包を持ち、なかには牛や馬の背中に荷物を載せ、おかみさん連は子供を負ふつてゐた。たいてい親分の顔見知りの隣の村の人たちであつた。

親分はその行列に向かつて、雙手を差し上げ大きな聲でたづねた。

「おい、それは何のことぢや、みんな、その行列は何のことぢやア。」

すると、行列のまんなかごろを歩いてゐる背の高い男が返事をした。

「おい、權の字、お前らはまだ逃げぬのかア。長州軍が攻めて來るちふのに、お前らの村ではなぜ逃げぬのぢやア。」

「おい、それではお前らは、なぜ逃げるのぢやア。」

「今朝ほど、街道の三つ角の道しるべを引きぬいて、道しるべの向きを變へたものがあるちふね。それだによつて、長州軍の斥候が道を迷うたうちで、明日は三千人も押し寄せて一村つ皆殺しにするかもしれんちふことア。こりや嘘ではない本當だア、道しるべも現に向きが變つてをるちふことア。」

「道しるべは、誰が引きぬいて向きを變へたのぢやア。」

「今朝ほどお前の村の、げぢげぢの運の字が道しるべを掘つてをるのを見たものがあるちふことア。明日は先づ、運の字が一番に殺されるだらうちふことア。」

その聲は、親分のうちの上り框に腰をかけた運の字の耳にもはつきり聞きとれた。咄嗟に彼は土間の外に駆け出して、這々のていで自分のうちに逃げ歸つた。彼は道しるべを引きぬいたり向きを變へたりした覺えは全然なかつたので、却つて腰をぬかすほどに狼狽した。彼は箱膳の引出しの紙幣を胸巻に入れた。街道から川の堤の方に行く小路を曲るとき、彼は殆んど本能的に曲り角に立ちどまつた。

「おい、みんな明日は危いぢふぞ、しかし儂は道しるべのことは知らぬのぢやア。」彼は聲をしぼつて呼ばはつた。小路から堤防の上に駆けあがり、あくまでも逃げて行くときほど裏山の麓の路を落ちのびてゐた行列にばつたり出會した。

「それ、敵が來たア。」彼は悲鳴をあげ、川原に逃げ込んだ。行列をつくつて歩いてゐた隣り村の人たちは、その悲鳴にびつくりして彼等もなだれを打つて砂原に駆けおりた。彼等は彼等の前を逃げて行く男が運の字であると知りながら、運の字の逃げて行く方向にわれ先きについて來た。それは恰度、目高の群れの一びきが左によろめくと、他の全部の目高が一せいに左によろめくやうな有様であつた。

——その後、維新になつてから福山の町役場の小使が、お濠に浮いてゐる鯉をつかまへ